

# 子宮頸がんワクチンについて

もとはしクリニック

本橋和夫先生

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、人にイボを作るウイルスです。現在、HPVは100種類以上の型が存在しますが、子宮頸がんから検出されているHPVは15種類程度で、これらはがんの原因になることから「発がん性HPV」と呼ばれています。子宮頸がんは、このウイルスの病変から発生することが知られています。このうちHPV16型とHPV18型は日本の子宮頸がんの約70%に検出され、感染後5年程度でがんを発生することもある(20代でのがんの発生もあります)ウイルスです。

HPVは接触により感染しますが、粘膜の非常に浅い場所で病変を作るため免疫ができにくく、運良く自然治癒しても、また何度でも感染を繰り返します。

子宮頸がん予防ワクチンは、抗原といわれるウイルスの一部にアジュバンドといわれる特殊な物質を加えることにより、免疫を強く起こさせることに成功したワクチンです。これにより、HPV16型およびHPV18型の感染を予防する効果が期待できます。しかしながら、あくまでこのワクチンは予防ワクチンで治療ワクチンではないため、感染している人に対しては無効です。このため、感染していないと考えられる年齢層の中学1年生から高校1年生までの接種が最も有効であると考えられ、この年齢層での無料化が開始されました。これによりHPV16型およびHPV18型による子宮頸がんの撲滅が期待されます。

問題になるのは他のウイルスによる子宮頸がんですが、これらは進行が遅いため子宮頸がん検診により早期発見、早期予防ができます。つまり子宮頸がんは、ワクチンと検診により予防できる病気なのです。今の若い世代が、予防できるはずの子宮頸がんという病気によって命を落とすことのないように、ワクチンと検診を進めていくことが大切なことだと思っただきたいと切に願います。